せたかむい
発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編纂室
第一〇九号（一日発行）
平成十年十月一日

年表で読む 古平の歴史

《17》

■古平に郡役所

明治十一年（一八七八）七月二十二日、新しい布告が出されて、わずか二年前の明治九年に定められた大小区制は廃止されることになりました。なにしろ新政府ができて間もないころのことですから、国の行政は揺れ動いていましたし、本州は内地、蝦夷地は外地というころでしたからこれも仕方のないことです。

新しい布告は、大小区に代わって郡区町村とするということです。これによって古平では第一・二・三区を廃止して、郡の下に町村を設けることになりました。

明治十二年、新しい布告によって開拓使から達（たっし＝上から下への通知）が出されましたので、古平ではその編成や郡内の組織作りを始めました。

明治十三年（一八八〇）三月、古平郡は浜中村に郡役所を置くことにし、古平・美国・積丹の三郡を管轄することになりました。古平美国積丹郡役所といい、郡長には、小樽高嶋忍路余市郡役所郡長の北川誠一が兼務しました。

■郡内の町村の改称と新設

郡役所を新設すると共に、それまでの町村名を改めたり、また新しい町もできました。

浜中村を改称して浜町

垂美村を改称して港町

新地町と入船町の一部を分割して、新しく丸山町を新設

これで古平郡内の町村は沖村・沢江村・歌棄村・浜町・港町・入船町・丸山町・新地町・群来村の九町村となり、この名称は戦後まで続きました。

■郡長と戸長

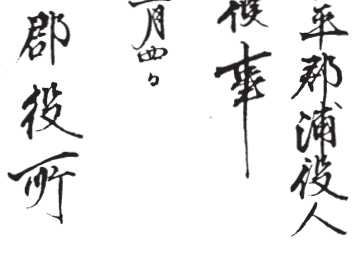
明治十二年（一八七九）、開拓使からこれまでの戸長制度についても達があって、戸長事務所を今後戸長役場と改めること。そして、戸長は都合によっては自宅で事務をとっても差し支えない、というものでした。また、郡内には郡長と戸長がいることになりますが、その職務の規定は項目で細かく定められていて、郡長は戸長を指導監督する立場にありました。

戸長役場は、郡内の九つの町村にそれぞれ置かれていて、道路などの修理や維持も戸長の職務でしたが、北川郡長から、海岸道路の清掃について次のような注意書が回りました。

「郡役所が管轄している古平ほか二郡の海岸や道路、溝などを見ると掃除が行き届かず、ごみの類がそのままになっていて極めて不潔である。また、道路の破損しているところもあって不便である。そこで各町村がまちまちに清掃をしないよう町村総代へ通知すること。来る三月四日から五日間で掃除が終えるようにする。もしも心得違いの者がいたときは、その人名を調べて速やかにこちらへ通知をすること。なお、掃除はもちろんのこと漁業の合間をみて、雪の始末など道路の手入れについても指示することを申し添える。」

また、このほか町内の各町村には投票によって選ばれた総代人がいて、住民と役所との窓口のような役目をしていました。

← 古平郡役所からの辞令



大正四年

2／23　カレイ網は近年稀な大不漁で、漁師も張り合いがないとて、ナギの日も出漁しない。鰊に期待してか、刺網一日に五百間平均出る。この日、禅源寺で今中素友画会あり出席す、大勢が集まっていた。網の売れ行きがよい。

2／24　網の売れ行きが面白いようだ。店にはひまなく客が来る。午後から暴風雪となり、余市通いの美保丸が湯内で座礁したとのこと。船客三十名程は無事だとのこと。

2／27　美保丸が座礁したので、西之宮丸は満船、往復で百人も客があった。古英丸が久し振りで入港する。

2／28　昨夜から今暁にかけて暴風雨は近年稀だ。出羽丸遭難当時を思い出す。家の屋根に雪があったので被害がなかったが、あちこちで損害がある。西之宮丸は小樽に避難したとのこと

3／1　大吹雪、この吹雪に刺網を買いに三、四人の客が来る。これからはますます薄利多売を心掛けなければならぬ。浜町で、精神病だった二十一歳の男が鉄砲で自殺したという。

3／5　余市波止場で船を待ったがなかなか来ない。午後六時頃乗船し七時半頃着く。本陣の浜では㊂、㊃支店の提灯が出ていて迎えに来てくれた。

3／13　朝、顔を洗わない内から客が来る。毎日、網の売れ行きがよい。薄利でもこんなにドンドン出ると商売も面白い。七千間程注文をした。

3／19　共同、入キ、上田などでは、浜に旗を立てて網卸しをしている。

3／20　みぞれで風も強く時化だ。夜、非常汽笛の音が聞こえるので、㊃に行って聞いてみると西之宮丸が危ないという。前に大山丸が岸に寄った辺りに流されて来ている。浜は石油やかがり火、提灯をつけて大さわぎをしている。乗組員六名のさけぶのが聞こえる。陸から一人が海に飛び込みロープを渡し、六名全員を救助した。家に帰ったのは午前二時であった。

3／21　古平でも水難救助の設備の必要性を感ずる。大山丸は船体が三つにこわれたが、西之宮丸はわずか五、六間沖で半分海に沈んでいる。

3／22　金魚売りが来る

3／23　昨夜、港町で鰊四もっことる。古宇・岩内では五百石から六百石とった。

3／24　蓄音機で大隈伯の演説を聞く。余市では、今朝鰊漁があったが時化で全部投げその上死人も出たという。

3／26　初鰊来る。昨夜から今暁にかけて入船町から前浜歌棄一帯で漁があった。△三枠、〇二枠、崎長、入キ一枠、入キ十五、六杯、刺網は歌棄から沢江は時化で投網できなかった。今日の漁獲は四千石ぐらいだ。

4／1　チラチラ雪が降る。昨夜は、前浜はケラ掛かりする程の大漁、刺網も二十五日夜から毎日のように掛かり、よいところでは四十から五十本あげたという。

4／4　昨日の様子から今朝も漁があると思っていたが、皆無であった。

4／6　今暁、沖村山中で通送の親子二人連れが、雪の下になって死んでいたという。

4／7　沖村道路のナダレで一人が死亡した

4／15　夜の九時頃、火事だというので出て見ると、沢江の橋の側の〇二の船小屋が燃えていて全焼した。

4／18　鰊漁も九分通り過ぎた。建網は半漁、刺網は八分漁、沖には三千トン位の汽船が一艘、帆前船が九艘いて賑やかだが、大和船は一艘も見えない。

（続く）

高野名幸作さんの日記から

当時の世相を見る

【10】

定期船が消えて４０年

明治時代 古平沿岸の海運

I

■明治初年の海上交通

明治以前から古平へは、東北地方からの出稼ぎや移住者が次々と来て、出稼者の中にはそのまま古平に定住する人も多くなり、明治十年ころにはすでに人口は二千人を超えていました。しかし、古平から余市までの陸路は峠にさえぎられ、ようやく人が歩けるほどの道しかありませんでした。まさにこれは〈陸の孤島〉でした。しかし、古平を支える鰊製品などは、当時も日本海航路で活躍していた北前船への売り渡しや、商業港として大発展していた小樽港へ主として輸送していました。これにともなって、小樽―古平間の海運も次第に開けるようになりました。

■小樽・古平間に新航路

明治九年、開拓使は石炭積み取りのため小樽―岩内間を二隻の汽船で、五日に一回の運航をしていましたが小樽―古平沿岸の航行が不便であることから、明治十年、その中の一隻、豊平丸（七百トン）を就航させ、必要によっては引き船にも使うことができるようにしました。

同年五月、開拓使小樽分署から古平・美国・積丹三郡に次のような通知が出されました。

「古平郡は、港はにぎわっているが陸地の不便なことは甚だしく、そのため、この度は格別の計らいをもって汽船豊平丸が小樽・古平間を航行するほか、忍路・余市にも臨時に寄港することになった。船賃などについては追って通知をする」

そして六月八日には再び、「汽船豊平丸は小樽・余市・古平間を、別紙日割りのように十日から運航することになったので、日時を間違いないようにして取扱所か駅逓所へ行くこと。出帆の時になって、あわてて荷物を積んだりするような不都合なことがないように注意すること。取扱人はこのことを町村内にもれなく通知をしておくこと。」

取扱人
古平新地町
西島金八

出航日時と船賃

六月十日　初日
小樽　出帆　午後九時
忍路　停泊　三十分
余市　停泊　三十分
古平　停泊

六月十一日
古平　出帆　午前九時
余市　停泊　三十分
忍路　停泊　三十分
小樽　停泊

小樽―忍路　大人　十五銭
忍路―余市　〃　十　銭
余市―古平　〃　三十五銭
古平―小樽　〃　六十銭

小樽新聞（明治39年7月3日）に載った命令航路の出帆広告

◎金刀比羅丸（岩尾増毛留萌）後八時出帆
◎積丹丸（古平美國積丹）隔日前八時
電話四五六番　清水回漕部

沿岸航路
大勢丸（古平美國積丹）隔日前八時
豊山丸
積丹丸（濱益雄冬増毛留萌）

◎美國丸（美國古平）毎日前八時
◎古余丸（湯内古平美國）毎日三日後六時
◎天塩川丸（マウカ）隔日後八時
◎厚田丸（厚田濱益雄冬）
◎豊山丸（岩尾増毛留萌）
◎積丹丸（古平美國入舸來岸余別）隔日後八時

合名會社　塩田回漕店
電話一〇六番

引き船賃
小樽―忍路　一隻　二円
忍路―余市　〃　一円
余市―古平　〃　二円
古平―小樽　〃　五円

ただし三十石未満、サンパ船、ホッ船、川崎船に限る。空船は三割減とする

古平への出入港船

明治11年	入港数	出港数
和船	一、四一八	一、一八三
汽船	二〇	二〇
帆船	〇	〇

――続く――

ふるさと歳時記

ふたりの祖母を偲ぶ

吉川　義雄

過去帳の祖母偲びつつ
経を読む

私の兵隊検査の日、余市で検査を終えて帰ってきたら祖母は亡くなっていた。私にとって母を失ったような、辛い別れであったことを思い出す。

大家族時代の当時、どこの家庭も似たような家族構成であったようだが、わが家も、私を頭に大体三年平均で妹や弟たちが増えてゆき、母から順次離された子どもたちの内、「ババ育ち」となった者が何人かでき上がっていった。

長男だから、私がその筆頭で一番可愛がられた口で、中には順序からゆけば当然その恩恵にあずかるはずの弟の内、祖母の好みに合わなくて除外された不運な奴もいた。

「ババ育ち」と、そうでないない者との待遇は歴然としていて、例えば、戸棚を開けると、オヤツとして黒砂糖の塊が兄弟分並んでいる。左から私の分、以下妹や弟の順序となっているのだが、「ババ育ち」の何人かのものは、やっぱりと分かる形になっていた。しかし、除外された者たちが黙認するはずはない。巧妙にその位置を変更させるぐらいは当たり前で、ひとの分のウラ側に歯形をつけて削り取るつわものもいた。

七人兄弟のうち、私が戦争に行っている間、築港で末弟が溺死し、そのショックで母の胎内にいた、八番目となるはずの女の児が死産となってしまった。

父のときも、母のときも、葬儀に集まった六人の兄弟は、自分の父母よりなぜか祖母の話がはずむ。今でも半数の三人は攻撃されている。

前浜の日溜まりで待つ
祖母を呼ぶ

吉川家と、細野家の関係を知ったのは、万事に晩生(おくて)の私が小学校の三、四年生ぐらいであったと思う。細野から吉川に婿養子に入った父は、自分から進んで私を母に逢わせようとはしなかったし、むしろ母の方が「ほら、ミミタレ（港町）のババに抱かれて来い・・・」と、よく冗談めかしに言っていた。

新地の分校から、浜町の本校に通うようになって、細野本家の前を毎日通るようになっても、気軽に祖母のいる家に入る気にはなれなかった。

下校時、猛吹雪になった日があった。目も口も開けられない激しさで、地を這う体力も限界にきたとき細野本家の前であった。初めて躊躇(ちゅうちょ)なく私は家に飛び込んで行った。

「ヨシオが来た。ヨシオが来たア・・・」と、目の不自由な祖母は、赤ん坊をあやすように私を抱きしめて離さない。

以来、何度も理由をつけては立寄り、その度に「可愛いやのう・・・」と、祖母を泣かせた。

祖母以上に私を可愛がってくれた、作吉伯父も、不運にもカリエスで長期入院した従弟の喜一君も、今はない。

朝あさな白菊慕う露の色

小学校も高学年に入った頃。今では死語になった「家柄」ということが熱っぽく話題になり、中には戸籍謄本まで持って来て「士族」を自慢する者もいた。「平民」の私なんか、それがどうしたと、心の中で反撥していた。どこまでルーツを辿ってみても人間以外の何者でもないし、身近で、この世で、私を慈しんでくれた、私の家柄を、私は心から尊敬し、誇りたい。

遥かなる故郷の思い出

追憶の記 ②

[49]

橘　美我　春

淡谷のり子のドレスは銀色がかった、肩と背中がベロンと出たもので、両腕に黒く長い手袋をしていた。靴も銀色で、ヒールは鉛筆のように細く長いものだった。体つきはでっぷりとしていて、いまにして思うと歌手の瀬川瑛子のような体つきだった。オナゴぶりは決して美人とはいえないが、ふっくらとした色白で、まぶたに青色のアイシャドーをしていたが、感じの良い魅力のある歌手だった。

最初に歌ったのは『別れのブルース』だった。歌手本人のなまの歌声は、街のレコード店から流れていた歌などとは全然くらべようもないすばらしいものであった。女性ファンからため息が出るほどであった。ファンの要望にこたえて次から次と『雨のブルース』などのブルースものを何曲も歌ってサービスをしてくれ、大拍手で幕が下りた。これ以来、いろいろな歌手の実演を見てきたが、これほど感動した舞台を見たことはなかった。

それから二年後に、私にも召集令状が来て軍隊に入ったが、盛岡－札幌－樺太と転々としながら、樺太の気屯（けとん）という小さな町の兵舎に駐屯することになった。

その時、私の戦友になったのが佐藤清という同年兵で、彼の出身地は北海道の炭鉱の町砂川市で、私と同じで学校を卒業するとすぐ東京へ出た。ところがそれが芝区で、私のいたところと目と鼻の先だったのである。職業もまた、私と同じ機械の技術屋であったので話もよく合うし、何でも話し合える戦友となった。

彼も私と同じに歌謡曲が大好きで、淡谷のり子のファンであることがわかった。そして、彼からおもしろい話を聞いた。

淡谷のり子の『別れのブルース』の歌詞の中に出てくる「メリケン波止場の灯が見える」のメリケン波止場というのは、私は外国船の多く出入りする横浜だと思っていた。佐藤清もそう思っていたらしい。ところが、淡谷のり子のファンとして、メリケン波止場の所在も分からないようではと思い、彼はレコード会社へ手紙を出して確かめてみたという。そしたらレコード会社からていねいな返事が来て、メリケン波止場は神戸港であることが分かったという。彼からその話を聞いて私もはじめて知った。

今年はどうしたものか、二度も入退院をくり返した。慢性の気管支炎で、完治する病気ではないが、一か月ぐらいで帰ってくるとヤレヤレ、これでわが家の楽しい食事にありつけるかと感激する。

たまたま鮪のトロ、大してぜいたくとは思わないが五切れほどと、練りウニの一つまみ、それにカボチャのみそ汁、ああなんておいしいんだろう。

食べることの小さな幸せ

福井　幸平

病院のあの糖尿病向け？　の食事からの解放感が嬉しい。毎日の食べ物にこそ、生き生きとした生活感があり、生きていることの幸福感がある。

最近、帰って来て秋刀魚やあぶらののったホッケのうまかったこと、感謝く。

故郷の味、おふくろの味、先人の残してくれた味覚に感謝して腹八分、ご馳走さま。退院の夕餉に先ずは焼秋刀魚

敬老会に招かれて

渡辺ハツヱ

今年、二回目の敬老会のお招きを受け、好天にも恵まれて送迎バスを利用して出席いたしました。

会場には私もふくめて、沢山の方が元気で和気あいあいとして、町主催の心づくしのおもてなしをいただき、大変嬉しく感謝いたしました。私は、来年喜寿を迎えます。これからも健康の維持に努め、元気でいて、またこの喜びを味わいたいものと思っております。

かえりみるに、亡父が漁業の関係で現住所に居住したのは、私が小学校の低学年のときでした。当時は、鰊場の網元の場所でした。古平の象徴とも思われる丸山の麓の広大な干場は、すべて鰊の網元の土地でした。当時は鰊の黄金時代、二月も半ばになると何百人ものヤン衆たちでにぎわい、町は活気づいたものでした。四月の上旬、この時期は明治・大正・昭和初期と続いた鰊場の最盛期でした。昭和二十九年を最後に、この前浜には春告魚であった鰊も幻の魚となってしまいました。

亡父が「鰊の群来は《清明》の前後が油断できないのだ。」と、言っていた言葉が懐かしく思い出されます。

亡母は、私たち子どもが寝ているうちに、浜へモッコしょいの出面に行きます。一日中働いて賃金の代わりに鰊が現物支給されます。暗くなってからちょうちんの明かりを頼りに、モッコを背負って家へ運び、私たち子どもも手伝ったものでした。子ども用の可愛いモッコもありました。貰った鰊は自家加工で乾かし、数の子、身欠きと製品にして仲買商人に売り、数十日後になってようやく現金収入になるのでした。

戦中戦後の混乱の時代、そして郷土の大火と、これらの苦難を先祖と共に乗り越えてきました。齢を増すごとに、両親が健在だったころが偲ばれてなりません。

来年の敬老会のお招きを楽しみにしております。

§§§§§§§§§§§

海岸通りの屋台店

竹内コト

今の国道が出来る前は沢江の海岸通りを通り、橋げただけが残っている旧古平橋を渡って浜町へ行っていましたが、その浜通りに小さな屋台が一軒ありました。この店には四季折々のものが売られてました。おやき、天ぷらなどはいつもあったようですが、夏になると氷水やアイスクリームが売られ、付近の人や、通りがかりの人たちにとても重宝がられていました。

屋台のおばさんは、みんなから「カッチャサン」と愛称で呼ばれていましたが、とてもよい人でした。私も友達といっしょにちょいちょい寄っては、いろんなことを話した覚えがあります。屋台ですから店は狭く、いすは、船で使うあゆみ板に足をつけた簡単なものでした。待っているお客さんがいるときなどは、食べたらすぐに立たなければなりません。

寒い日など、「オガッチャ、おれにもおやきくれや」と、お客さんが来ると、あつあつのおやきに熱い番茶をサービスしてくれます。ときには屋台は、沢江の人たちの親睦の場でもあったようです。

⇦（次ページ下段に続く）

古平町岬短歌会九月詠草

竹内コト

鬼が沢の湧き水きよき谷間にひっそり咲けり夕すげの花

池田テル

一穂展を巡りて見たる記念写真知る人多しもあらかたは亡く

鈴木時子

二十日盆のお参り終へて帰る道海わたりくる風の涼しさ

田中香苗

お互ひに痛み失せれば病室の夜の話題のつきることなし

東美知

台風の過ぎたる庭にコルチカムいっせいに咲く紫淡く

菅原節子

受賞せし友を慶び松毬の鶴の番を贈る

堀典子

さはやかな初秋の日なり窓を開けゆき交ふ船を眺めて飽かず

榊佳代

イベント近き朝のしじまに草刈ると切れ味の良き鎌の音たつ

山口スヱ

御霊舎に供へし萩の散り花を掃き清め秋かとうべなふさびし

奥山きよみ

立葵の花終へし茎刈りあぐむに種は音して降るごとく散る

丹後初江

台風のうねる大波は前浜の道まで高く波の花と落つ

古平ホトトギス会

古平に老いて悔いなき茸採り　斉藤波留

言葉切れ団扇くるくる膝の上　仲谷比呂子

合宿の続き帰省の伸びにけり　仲谷安代

夫病んで端居独りは味気なく　大和田絵伊

剪らず置く牡丹雨に崩れにけり　仲谷美砂

一人静か二人静と花愛づる　水見句丈

忘れいしメロンは既に香り失せ　福井幸平

眼帯をとり庭石の青蛙　山口悦子

鱈船の出港競う機の音　大島喜恵

留守にせし庭の牡丹に迎へられ　山口浪

二三羽の鵜もゐるテトラポッドかな　越野敏雄

流れ星連なる嶺々を一閃す　越野清治

大いなる雲の峰より戻り船　西島サツ子

太宰読み時を忘れて明易し　外山俊久

鰊談昔話として聞かれ　中村樺宵

（前ページより続く）

天ぷらは主にサツマイモ、ゴボウ、タコなどでしたが、なかなか上手に揚げていました。飲み物といえば、今は見かけないラムネでした。

私の少女時代に味わった屋台の味ですが、気軽に入れたあの屋台の雰囲気が懐かしく思い出されます。

石井愛子

川柳

爺の背な家族背負った円い背な

旅の途中終着駅まで二人連れ

婆さんは何の歌でも盆踊り

渡辺ハツエ

敬老会来年会場狭いかも

返事ない亡夫に声かけ彼岸明け

大さかへパパと二人の春りょこう　小五水見翔人

きゅうしょくのさつまいもぼくだいすき　小一水見玲央